

第 55 回「帰国子女教育を考える会」研究例会

(2008 年 1 月 19 日(土)14:00～17:30 於：龍谷大学大宮学舎西校 2 階大会議室)

テーマ：「企業での教育相談から実感する海外帰国子女教育の現在」

発題者：(敬称略)

司会：井嶋 悠 (本会事務局)

赤塚 民三 (松下電器産業(株)国際人事センター海外子女教育相談室)

[2009 年 4 月からパナソニック(株)に社名変更]

森 祥充雄 (IBM 人材ソリューション三洋電機事業部海外子女教育相談室)

吉岡 惇 (三菱電機(株)人事部海外子女教育相談室)

堀江 保子 (松下電工(株)人事部)

[2009 年 4 月からパナソニック電工 (株) に社名変更]

山下 良一 (海外子女教育振興財団関西分室 教育相談員)

要 旨

(以下の要旨は当日の記録を基に事務局の責任で整理したものである。)

小島勝会長の挨拶

○事務局移動の報告 [千里国際学園から大阪 YMCA 国際専門学校へ]

○海外進出企業の相談現場は国内の帰国子女教育問題が凝縮されているので、活発な議論を期待する。

発題Ⅰ 赤塚 民三

- 1、海外赴任者・帯同家族員・子女の数は減少傾向にある。
- 2、若年層や独身赴任者が増加傾向にある。
- 3、海外での就学前教育機関の情報収集が緊要の課題である。
- 3、本会との連携の在り方を模索中である。

発題Ⅱ 森 祥充雄

- 1、海外子女の学校への不適応問題
 - a.語学力の問題による不適応
 - ・英語圏の現地校在籍生徒の不登校と母子帰国の実例
 - b.学習形態の違いによる不適応
 - ・アメリカでの「調べ学習」「少人数グループ学習」と日本の「覚え学習」「講義中心学習」
 - c.評価方法の違いによる不適応
 - ・絶対評価と相対評価
 - ・加点法と減点法
 - d.人権意識の違い
 - e.個別子どもや家族の問題
- 2、教育行政面での不条理の問題
 - a.帰国子女枠での高校受験資格 [海外在留年数資格] の不統一
例：近畿圏資格要件一兵庫県・京都府・滋賀県 1 年間、
奈良県・和歌山県 2 年間
大阪府 3 年間)
 - b.編入問題
学年度開始時期 [日本：4 月、欧米：9 月] の違いからの進級問題
- 3、母語〈日本語〉習得レベルの問題
- 4、家庭で心がけること
 - a.家族内コミュニケーションの大切さと地域共同意識の育成
 - b.現地校等での体験学習・参画学習・能動的学習への積極的な支援〈結語〉家庭教育力の重要性
ねばり強さ、セルフコントロール、ユーモア精神、たくましさの育成

発題Ⅲ 吉岡 惇

- 1、勤務社の海外勤務者数および帯同家族員数〈地域別〉から見えて来ること
 - ① 海外勤務者数は東南アジアや中国が増加傾向にある。
 - ② 帯同家族員数は今も北米やヨーロッパ地域に多い。

2、社内の教育相談室の仕事

赴任前

- ① 家族との信頼関係を深めること
- ② 海外での生活の不安を取り除いて安心感を与えること

赴任中

- ① 子どもが学校生活に適應できているかを確認するための家庭や学校を巡回訪問
- ② 場合によっては、帰国後のことを考えて体験入学のための一時帰国を勧める

帰国前

- ① 安心して帰国できるように多角的に配慮する
- ② 帰国後の編入学の指導、世話

いずれにしても安心感がもたらされる情報提供ときめ細かいコミュニケーションを図る。

3、問題点

- ① 海外では、とかく私学や一流校中心の偏った情報が流されがちであること。
- ② 帰国後の日本では、学校の先生や教育委員会の帰国生への理解不足に起因する問題が生じがちであること。
- ③ 大勢いると思われる元海外派遣教員の姿が見えない現状であること。
- ④ 海外の子どもたちの生活の様子など、もっと情報を発信してもらいたい。
- ⑤ 元派遣の先生方の活躍を期待したい。

発題Ⅳ 堀江 保子

1、当社の海外展開の現状

進出国・海外法人・海外拠点・海外従業員・日本人出向者・帯同家族員の現在

2、上記現在の特徴

- ① 日本人出向者の赴任形態の割合は、家族帯同が5割強、単身赴任が4割強、独身者が1割弱で単身赴任者と独身者を合わせても家族帯同者にはやや及ばない。
- ② 当社の海外帯同子女の約4割を小学校就学前の子どもが占めている。
このことは、昨今、喧伝されている企業派遣海外赴任者の若年齢化傾向を裏づけていると考えられる。
- ③ 一方で、中高生の増加、
- ④ 学齢期子女の増加、
- ⑤ 中国への赴任家族帯同子女の増加、

3、相談業務から見えて来る最近の傾向

- ① 受験や帰国タイミング相談の増加
- ② 受験校・帰国子女受け入れ校の資料請求の増加
- ③ インター校進学にあたっての相談増加、

4、海外子女教育における課題として考えること

赴任前

- ① 帯同子女の低年齢化について。
母語は自然には育たないので両親が家庭で意識して日本語を使うことに努めることの大切さ
- ② インター校志向が強いことについて。
現地に日本人学校があっても英語への憧れが強いことから、インター校への進学を望む場合がありその長所と短所を伝える大切さ
- ③ 現地に日本人学校や補習授業校がない地域の情報収集について。
参考になる例が少ない場合、体験者探しに苦労することまた体験者のネットワークの必要性

赴任中

- ① 受験期にある子女への配慮と柔軟な対応について。
海外赴任者の異動時期や家族の帰国時期の検討、またインター校卒業前であれば、家族残留も検討の必要
- ② 帯同家族員である中高生の増加に伴うサポートについて。
日本の塾の進出によって情報入手が、比較的容易な地域もあるが、原則的には入手したい情報は自ら得る自助努力が必要。

ただし、大学入試情報は、意外に入手しにくい。

③ 教育費補助について。

幼稚園や高校、とりわけ高額な私立校やインター校の場合、自己負担と会社補助の線引きが必要。

帰国時

① 日本の高校への編入について。

カリキュラムの違い(日本の4月始まりと海外のおおむね9月始まりの違い)によって受け入れ先探しには苦慮している

② 幼稚園・小学校・中学校(とりわけ公立校)での適応には心配している

③ 帰国生が多い地域への帰国を強く希望する場合、過去の帰国生受け入れ実績にこだわる傾向にある

帰国後

帰国後のフォローとして未就学者(不登校者を含む)や語学の伸長に関して、企業相談員がどの程度コミットできるのか、或いはすべきかのジレンマがある。

発題 **V** 山下 良一 (尚、氏は2009年4月より財団を含めた15社からなる「関西海外子女教育連絡会」に発展的吸収)の呼びかけ人でもある。)

上記発題を基にしたのまとめと提言として、

① 低年齢層の出国の増加

② 社会的関心の低下

からの対策として、

① について

- ・「現地の幼稚園情報の充実と日本語環境のある幼稚園の整備」つまり「ネットワーク作り」の必要性が強調された。それと、
- ・「幼児の言語習得の特性にいての周知」
- ・「日本での学校体験もなく帰国する子どもへの対応」の検討

② について

- ・「LD児(Learning Disorder[Disability] Children 学習障害児童生徒)も含めた多様な学力の児童生徒への対応」
- ・「公立学校への啓発」(文部科学省の言う「どこの学校も当然のこととして受け入れ、何が必要かが分かって対応できる」ことの具現化)
- ・「保護者への啓発」活動の重要性と必要性

そしてそれらの啓発活動こそが本会の中心課題である。

自由討議から

○質問：「企業相談員として赴任国について調べ、そこにある日本人学校・現地校・インター校についても情報入手し、赴任家族とどの程度の知識を共有しているか」

回答：「赴任前研修の際、資料作成して配布し、説明している」

「現状は説明するが、指導はしない」

「親が一度は学校を見てくるよう助言している」

閉会挨拶 (会長・司会者)

本報告での問題点をできるだけ多くの人たちと共有し、あるいは相互に啓発していくことが重要課題であることを合意事項として本会はそれにより積極的に関わって行きたい。

第 56 回「帰国子女教育を考える会」研究例会

(2008 年 6 月 14 日(土)14:00～17:00 於：龍谷大学大宮学舎西校 2 階大会議室)

テーマ：「今あらためて日本の教育の長所短所を考える
ー海外帰国子女・外国人子女の保護者の眼を通してー」

発題者：(個人情報保護のため人名略記)

司会：小路 清一 (本会事務局)

Nさん (中国・上海で 11 年間在留。2007 年に帰国。夫は現在も上海に単身赴任)

長男 (現高校 2 年生)：幼稚園年中～中学校 3 年生在留

モンテッソーリ幼稚園・上海日本人学校

帰国後、中高大一貫校に入学

長女 (現中学校 2 年生)：1 歳半～小学校 6 年生在留

上海日本人学校

Yさん (1989 年～1994 年：シンガポール。帰国後、1999 年～2006 年：アメリカ)

長女 (現大学 2 年生)：2 歳～小学校低学年 シンガポール

中学 2 年生～高校 (卒業) インターナショナル
スクール及びアメリカ現地校

長男 (現高校 3 年生)：シンガポール生まれ。

小学校 4 年生～中学校 (卒業) インターナシ
ョナルスクール及びアメリカ現地校

Hさん (母〈発題者〉英国人・夫君日本人)

長男 (現大学 3 年生)：日本国内のインターナショナルスクール

次男 (現高校 2 年生)：日本国内のインターナショナルスクール

要 旨

〈以下の要旨は当日の記録を基に事務局の責任で整理したものである。〉

小島勝会長の挨拶

3 人の保護者の発題を通して、帰国生保護者の会の「かけはし」「エコー」をはじめとする
参会の方々の活発な意見交換をお願いしたい。

第一部

発題 I Nさん

1、上海日本人学校の充実した教育体制への感謝

(注・上海日本人学校：2007 年 浦東校が発足し虹橋校との 2 校となる。)

2、帰国後の現在

長男：「文武両道」を掲げる中高大一貫校で部活動〈サッカー部〉に意欲
しかし、学業との両立の難しさから将来を考えて退部

【長男から見えて来る日本の教育】

①部活動を神聖な活動としてとらえ、多くの学校が部活動に重点を置いて
いることへの疑問。

・スポーツ選手の活躍からの刺激を受けて続けたいとの意識と学業に
ついて行けなくなることで、自分を見失う若者が多いのではないか。

②本分の学業を定着させての部活動の充実を。

長女：【公立中学校に進学した理由】

幼少期の海外生活からの意識面での或る偏りを懸念して公立学校進学
を勧める。

【在籍しての実際】

①様々な社会背景を持った子どもたち

②家庭に悩みを抱えている子どもたち

③心の豊かさが感じられない子どもたち

④上海日本人学校と違い下校時間の制約もなく「部活動」に打ち込め
られる環境での長女の意欲、また良い友人関係

【二人との日々から】

将来への不安を抱きながらも、長男長女母（父は単身赴任）三人三様の議論の白熱から、日本の教育の中でどうすべきかを考え歩き出せたとの実感。

発題Ⅱ Yさん

日米の教育体制・方針の比較を通しての教育の違い、或いはそれぞれの長所

【日本】

- ・ホームルーム担任の濃やかな指導とケア

【アメリカ】

- ・『problem and solution』（課題を見つけそれを解決して行くことの重要性と必要性からの論理的思考力のトレーニング方式）での「アドバイザー」の存在
自身による1年間のカリキュラム作成での、アドバイザーの Best choice! との言葉に見る懐の深さ
- ・クラス担任がいないことでの苦勞
「いきなりオリンピックを目指せ」というような心境

【両者から見えて来ること】

- ☆日本のクラス担任の存在からの日本人の秀でた才能の再認識
- ☆アメリカの実力主義

【両国での生活からの感想】

- ☆アメリカでの家族の絆の深まり [例：家族協力しての深夜までの学習]
- ☆一度は泣く経験をするのが海外子女
- ☆アメリカでのアジアや日本では感じなかった差別体験
- ☆「家庭は第二の担任」の実感

発題Ⅲ Hさん

長男・次男の学校生活からのインターナショナルスクールと日本の学校の違い

【インターナショナルスクールでの次男の経験】

- ・8年生で学業不振から転校勧告を受ける

【対応】

- ①個人指導、Shadow teacher（LD 児童生徒のための補助教員）を検討する
- ②しかし、学校側はそれらを拒否し転校を主張
学校側の主張「この学校は優秀な子どもだけを教育する学校である」
- ③或る人の学習到達度調査を経て、現在不足分を学習中

【疑問】

こう言う場合の日本での教育相談窓口の不明

【日本の学校の長所・短所】

- 《長所》教える順番が明確なこと、但しそれから外れると fuzzy
- 《短所》創造力の育成の不足

自由討議から

- Yさんへの問い「ESLの指導について」
「二人とも受講。但し、自己申告が原則」
(帰国保護者の会からの補足説明として)
「その体制に関してはアメリカ国内でも地域差があり、現地滞在が2、3年では現地校への適応と英語力の習得には自ずと限界がある。」
- 「子どもの個性伸張には学校だけでなく、家庭のサポートが大事」
- 「日本の公立学校教員のモチベーションの低さとモチベーションを維持するためのシステム作りができていない、との指摘は正にその通りである。」
- 「派遣元教員は1万人ほどいるので、『隠れ帰国子女』『隠れ帰国大人』と揶揄されないためにも出会いの場を」
- 「日本の学校教育での相談窓口については、国際児童生徒（外国籍を持つ児童生徒）にとって深刻な問題で、日本のクラス担任制度をもっと発信できないか。」

小島会長の総括と所見

- 1、各発題のキーワード・キーフレーズとして、
Nさんの「部活動問題」
Yさんの「problem and solution」
Hさんの「インターナショナルスクールでの学力」
- 2、所見として、
日本の学校が、基本的に農耕社会の共同体をベースにした相互扶助の関係を前提にしているのに対して、アメリカなどの西洋社会は、独立した個人が念頭にあり、個人で自分の未来を切り拓く力を身につけようという独立的な権利の主張が強い。
現在の日本はその過渡期で、共同体的な相互扶助の精神も危うくなり、いずれは西洋社会の独立した個人重視へと移行するのではないか。
しかし、両者の良さを残しながら進むのが好ましいと考える。

第 57 回「帰国子女教育を考える会」研究例会

((2009 年 3 月 7 日(土)14:00～17:30 於：大阪 YMCA 土佐堀館)

テーマ： テーマ：「帰国子女教育での日本の日本語教育から見えて来るもの
ーコロンバス補習授業校及び帰国後の小学校教育での実践を通してー」

発題者：(敬称略) 司会：井嶋 悠 (本会事務局)

佐々木 豊 (元コロンバス補習授業校長・現池田市立緑丘小学校校長)

コメンテーター

真嶋 潤子 (大阪大学世界言語研究センター准教授 日本語教育)

要 旨

(以下の要旨は当日の記録を基に事務局の責任で整理したものである。)

I 実践からの発題：佐々木 豊

A コロンバス補習授業校長として

- 1、赴任校アメリカ・オハイオ州コロンバス補習授業校の沿革と赴任時の業務等
 - ①1979 年、オハイオ州に日本の自動車会社ホンダの工場誘致が契機
 - ②自身の赴任 1995 年
授業担当： 国語・算数・数学・社会
 - ③当時の世界の補習授業校
日本人学校在籍者の割合が約 38%に対して、補習校約 33%にもかかわらず補習授業校のこと人々の意識に浸透していない。
全世界の補習校の約 70%が北米に存在。
- 2、校務の中で
 - ① 現地校の先生からは専門学校風に見られていたが、あるときに現地 ESL(English as Second Language)担当教師の視察・見学での会話
「日本語が分からない自分はたった 2 時間しかいなかったが、頭がパニック状態になった。現地校へ通う日本人の子どもの気持ちが大変よく分かりました」と、氏の「その感想を是非とも現地校の先生方にお伝え下さい」
 - ② 補習授業校歌が、そこで学ぶ子どもの心境を言い当てて、学校の様子をよく語っていて感動的でした。
 - ③ 「私」の辞典作り
子どもたちそれぞれが、ある言葉から感じたことを文章にした冊子
 - ④ 「お母さんの勉強室」
そのつながりから帰国後の親からの日本での子どもの現状を知らせる手紙等
帰国後も交流を続けている。

B 帯同した長女と次女のこと

[長女]

中学校1年で渡米し、中学校3年の12月に帰国し、公立中学に入学。
高校は、帰国子女受け入れ校に合格したが、大阪府立高校国際教養科に入学。
大学卒業後、就職し現在は結婚し、家庭生活を送っている。

[次女]

今春、大学を卒業して就職の予定。

C 2007年、海外子女教育振興財団の委嘱による「チューリッヒ補習授業校」巡回指導

[内容]

対象：中学2年生と3年生の5人

(いずれも父親がドイツ語を母語とするスイス人、母親が日本人の国際結婚の子ども)

内容：森 鷗外『高瀬舟』を教材としての2時間授業

[1時間を文章の音読、あとの1時間を自分の読みたい箇所の再読]

そこで氏自身が学んだ事

- ・一人一人が『高瀬舟』の主題でもある主題[「足るを知る」や「安楽死」の問題に向かっていること
- ・日本では「知識を教える教育」であって自分で考えていない、覚える国語授業になっているのではないかという反省
- ・自分で考えることこそが本当の授業ではないか、
そして一人一人の子どもを活かした「あなたらしさ」を教えることが大事
そこからの或る思いとして、
日本の国技である柔道が国際化して JUDO になったことで、本来あるべき「道」や「心」がなくなるのはいかがなものか。

II 佐々木氏の実践への論評と本日のテーマに係る自身の研究事例から：真嶋 潤子

A. 論評

☆ESL担当教師の視察・見学での会話に関して

「異文化を生きる」ということ、またその普遍的価値を示す教師としての佐々木先生が存在

B. 自身の研究事例からの本日のテーマ

[事例として]

- ・ドイツ・フライブルクの外国人児童生徒への移民教育
- ・元海外帰国子女である学生の卒業論文指導
- ・言語教育、特にバイリンガル教育の立場から考える帰国生

[上記事例から]

◇元帰国生へのインタビュー調査と地籍調査から。

「異文化体験の影響」について「異文化体験を自分のライフコースにどのように位置づけたか」への回答として

- ・「同化ではなく、適応していった」
- ・「帰国生だから」というプレッシャーの中で評価された経験を持つ者は、当然、異文化体験を肯定的に捉え、逆は否定的に捉える。

◇バイリンガル教育の観点から。

4タイプ(1.「母語のみのモノリンガル」、2.「現地語のみのモノリンガル」、3.「母語と現地語のバイリンガル」、4.「どちらも不十分なダブル・リミテッド」)の可能性からの最も理想的なバイリンガルの姿

(なお、ダブル・リミテッドはセミリンガルとも言われるが、氏はそれは差別を帯びた用語であるので敢えて使わないとされる)

◇「ダブル・リミテッド」の子どもを通しての考察

母語教育の重要性

母語形成期にある9～10歳以前に第二言語のみによる学習は、子どもを「ダブル・リミテッド」の状態に陥れる。

第二言語の習得は母語以上になることは普通は不可能である。

それらからの母語・継承語教育の意義と重要性を踏まえた問題としてある、日本国内の外国人児童生徒(例えば、日系の南米人など)の言語教育の課題
◇外国人児童生徒には「日本語」の教育だけが決して必要なのではなく、母語を伸ばすことが全ての基礎にあり、そういうことを理解した日本語教師の養成の必要性

自由討議から

○「帰国生らしさとは？」

(佐々木)「言語で象徴されるように皆が違っていい。それぞれの個性が見える」

(真嶋)「集団や社会のマイノリティとなることがどういうことか、身をもって分かる。体験することの大切さ」を語られた。

○「大学生段階では母語がほぼ形成されているのなら、中高段階での英語のイメージ教育の積極的活用の是非は？」

(真嶋)「教養ある日本人の大人として社会で活躍してもらうためには、中高での英語のみのイメージ教育でいいとは言えない。なぜならば、イメージ教育と母語の学習、敬語表現の学習、母語の読み書き能力も小学校段階では完成しないからである」と的確に回答された。

○「ダブルの子どもの方が、日本で学ぶ子どもたちよりも、言葉を通して『考える教育』で言語を獲得することに優れているのではないか。日本の国語教育として学ばなければならないのではないか」

○「佐々木先生の国語教育の実践例からも、自分たちの実践例が間違っていなかったことを再確認した」

○「多くの帰国生の個性を活かすためには？」

(佐々木)「群れないことと『交流』の視点の大切さ」

○「求められる教師像、特に受け入れ校教師の心構えは？」

(佐々木)「体を張って命がけで子どもとコミュニケーションできる教師」

(真嶋)「硬直した考えを持たず、柔軟で臨機応変に対応できる人。自分で課題設定して問題解決できる人、そこに知恵を働かせられる人」

○(司会者〈井嶋〉から)「国語教育と日本語教育の相互性からの国語教育での学力観の討議への期待」

閉会

小島会長のお礼と挨拶